

づかひ、それらの片鱗をうかがふここの出来る毎日をほん  
まうにうれしく思ふのです。

\* \*

心から尊敬して止まない先輩のもで、我が心を信じ切  
つてひたむきにその神の心を寄せてゐてくれる愛しき幼な  
兒等と共に、生き甲斐ある生活を爲し得る現在を、虔敬な



「なんだかやさしさうな先生だね」。始めて登園した所、  
お遊びの時に始めて先生と呼ばれてピアノを弾くこみを所  
望されてキーに手をふれた時だつた。

男の子のくせに女の子の様な聲を出して女の子さばかり  
遊ぶ白い毛糸服に長めのエプロンをかけた子が私の横顔を  
ジロ／＼見ながらそばの女の子にさゝやいた言葉。新米  
の先生を子供でもやはり批評眼を働かせて見るのだナーまほ  
ほえみながらチラミ子供の顔を見た時に恥かしさうに面を  
ふせた内氣な子、すつミ前から幼稚園に來てゐるらしく、

る心もて感謝すると共に、この神の恩寵に報いんがために、  
乏しい自分を磨くべく更に心に鞭打つて保育の道に精進し  
たいと思ふばかりであります。この道こそは、實に長く自  
分のさがし求めてゐた清く尊い我が使命であるこみを、一  
年間の保姆の生活が教へてくれたのであるこみを、今にし  
て始めてしみ／＼考へてみるのでした。(八、三、一七)

山口市 白石幼稚園保姆 寺田 明 惠

かなりおませらしい連中はグループを作つてはしやぎ廻つ  
てゐる。

四月のこみで先生方のお手がたりない見えて淋しさ  
うに皆の遊びを見てゐた女の子が少しづつ私の方へ寄つて  
來てこわ／＼私の手をこつた。

ほ／＼づりしてやりたい様な血氣の良い頬、黒の腫、フサ  
／＼したオカッパ、やはらかい嗅げばお乳の匂ひのしさう  
な可愛い手、弟妹を持たぬ私はすべてのこみがたまらなく  
可愛かつた、その表情が、その動作が……

絶対に信頼しきつてゐる母以外にかうも親しみかうも敬愛してくれるものか感謝と愉悅の中に半歳ばかりは夢の様に過ぎた。

そろ／＼子供各自の個性も見えて來た。

子供に少しは話も出来る様になつた。いたづらつ子なきそろ／＼鼻について來た。毎日同じ様な保育案にもこちらからあきて來る頃になつた。

研究すれば奥の知れない幼児教育と云ふ大森林に一人行き迷つた様な心細い感じが毎日／＼私の神経をミがらせた。

これからさうしたら眞に面白く子供と共に生活出來彼等を純眞に子供らしく導くこゝが出来やうか、書物を見ても理想の保育はおぼろげにもわかつた様に思はれても實際子供に直面して彼等の、雲の中から櫻の花でも咲き出したこともまたこへられるやう様な空想も幻想もつかないフツフツした様な質問、赤裸々な生活をブチマケての遊びに對しぎの程度に應じぎの程度に抑制すれば良いものか一々手をこる様に教へて下さる人がほしいと到底出來もしないこ

ままで思つて見たりした。

それに加へて實社會へ踏み出して始めてわかつた荒波、すべての人の人格の裏面。

つくづく職業婦人云ふレッテルを貼つてしまつた自分を後悔したのも此の頃だつた。

月日は遠慮なく水の如くに流れ去つた。

一年経ち、一年半経ち、二年もやうやく過ぎやうこしてゐる此の頃、來し方を振り返るこよくも／＼子供からぬけきりもしない時からやつて來たものだ、やはり何も尊い經驗になるものを、第一の難關をまけないできりぬけて來たこ自分ながら感じる時もある。いつまでかう云ふ境遇に身を置いてゐるものかわからぬがミにかく精進だ！、向上だ！、梅一輪一輪つつの暖さ。ねこ柳も白い可愛い芽をふき出した。桃の節句も近付いた、道の若草も萌え出やう。園全體なんミなく春めき、はちきれさうな希望と喜びを胸に抱いてはねまわる子供。春だ、櫻の茶掲の肌にもやがてふき出やうやはらかな若芽の氣はひも感じられて……

よろこびの春だ！ 新學の春だ！ 明日の子供だ！ 第

二の國民だ！　そしてそれを導く我々だ！！

力強く大地を踏んでしつかり立たう。



み　　づ　　り

(一)

「先生お母様になつて頂戴よう」

もの、總てがほゝえまゝに居られないあざけなさも静かさだ。

日のよくあたる、程よい廣さのお庭に敷いたござの上で

「お母様早くお食事にして下さいな」

おまゝ事がはじまつた、お砂場用のお椀がお茶椀、バケツ

「おかあちやま、おなかぢちゆいたのよう」

がお釜、トンチルが茶箆筒等の重要な役目をして居る。ござ

お姉様になりましたお嬢さん、赤ちやんになりきつた

のすぐ横の小さな花壇には、秋に皆で植込んだチェーリッ

お嬢さん方からのお食事の御催促。

プの芽がやはらかい土を突破つてそろ／＼小さな頭を出

「さあ／＼作りませうね。今日は何にしませうか、お壽

しかけ来て居る、お嬢さん達は甲斐々々しくも御掃除やら

司？　草園子？　何でもお好きなものにしてよ」

お買物に出掛けたりして大忙し。四、五人居るお坊ちやんは

バケツのお釜、砂によごれた木椀のお茶椀等がおさない

A先生と御一緒に少し離れてあるお池の水かへに大忙し。

世界のお料理を作るのに充分役立つてくれてまた／＼くまに

フツと見上げる空の美しさ、青々澄み渡つた空にうつす

おいしい御馳走が出来る。

ら／＼飛びかつて居る雲まで何て美しいんだらう。あゝ何て

お坊ちやん方はお池の汲出しにもあきたま見えござの上

の／＼かな朝だらう、何て静かな氣持だらう、みるもの聞く

に足をなげ出して日向ぼつこをして居る、誰か歌ふさも